

2019年5月18日(土)

老球の細道482号

詩「自分たちに力がないことを恥じよう」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「智恵子抄」で有名な詩人高村光太郎が、昭和初期「極東バスケットボール選手権大会」を観戦した時の様子を詩に綴り日本バスケットボール協会に寄贈したことはあまり知られていない。妻の智恵子が学生時代バスケットボールをプレイしていた関係からだろうか。

アスリートの激励になるような詩も作家や文豪たちは結構書いている。その中で私が好きなのは武者小路実篤のものである。大学生の時に読んだ高野悦子著『二十歳の原点』に掲載されていた「もう一息、もう一息 (中略) 勝利は大変だ だが、もう一息」と出会ってから、負けが続きどん底に陥っている時に、この詩には何度も助けられた。

先日高体連の地区大会を観戦した。力のある選手が色々なチームにたくさんいるのだが十分に力が発揮できないようだった。いつも決まったチームが勝ち、決まったチームが負ける。試合が始まる前から自分たちで無意識に勝敗を決めつけていないだろうか。とかく他人から自分を決めつけられるのは嫌がるが、自分で自分を決めつけるのには抵抗がない。

今は昔、潜在的能力が十分にあるのに、中学校時代の実績や自チームの今までのレベルなどで力を発揮できない、いや発揮しようとしなかった選手たちに伝えた詩がある。

【自分達に力がないことを恥じよう。そんな言い訳をすることを恥じよう。そんな言い訳をするのは臆病ものだ。

自分達には力はあるのだ。ただ出さないのだ。出すのが怖いのだ。出してまだみないのだ。もし自分達の力が弱かったにしろ、真心の力は弱くないはずだ。

弱いというのは精神が足りないからだ。

力はあるのだ。ただ出さないのだ。臆病で出さないのだ。本当に出せば力はあるのだ。ありながら出さないでいて、力がないということを恥じようじゃないか。

自分たちはもっともっと力があるのだ。ただ出さないのだ。十分に出してみないのだ。死ぬ覚悟ができていないのだ。生きる覚悟もできていないのだ。まだ本当に目が覚めていないのだ。

力はあるのだが、まだ出し切らないのだ。

臆病から、そしてつまらぬ遠慮から、そして何より怠惰で、事なかれ主義がいけないのだ。本気になれば力が出るのだ。恐ろしい力も出るのだ。世界も動くのだ。皆が一致するのだ。そして力が燃え上がるのだ。

少なくともそれだけの力が真心にあるということ信じよう。本気さが足りなくせに力がないと言うことを恥じよう。

力はあるのだ。自分たちには力はあるのだ。

全国にわたる友達にも力はあるのだ。ありすぎるのだ。ただそれが、一緒に燃え上がるには自分の誠意や、本気や、勇気や、精進がたりないのだ。

力はあるのだ。力はあるのだ。それが一緒に燃え上がれば、人類も動かせるのだ。その力はあるのだ。埋もれてはいるが、力はあるのだ。

この埋もれている力を、信用しようではないか。そして一步一步、自分で進んで行こうではないか】(武者小路実篤『人生論・愛について』から)